

～東三河地域内関係人口創出事業 先進事例集～

近隣自治体から「関係人口」を受け入れ 地域課題の解決に取り組む先進事例



令和5（2023）年3月

愛知県東三河総局企画調整部企画調整課

【はじめに ～本事例集の趣旨～】

東三河地域では、人口減少や高齢化により地域づくりの担い手が不足しつつあり、生活環境や歴史文化、産業等の維持・発展に、大きな影響を及ぼしています。

一方で、東京や名古屋など都市部に暮らす人々が、地方での祭りやイベントへの参加、兼業・副業などの仕事の関りをきっかけに、その地方のファンとして地域を支える新たな動きが生まれています。

こうした新たな地域と多様に関わる人材を「関係人口」と呼び、積極的に地域の担い手として取り込むことで、地域課題の解決や地域の活性化につなげていくことが期待されます。

このため、本冊子は、関係人口を活用して地域活動を発展させている先進事例を紹介することで、高齢化等により今後の活動に不安を抱える地域の関係者向けの手引書として作成しました。

ぜひ、地域活性化に向けた取組のヒントとしてご活用ください。



〔目次〕

■第1部 関係人口に取り組むメリットや手順について

1. 関係人口を活用する意義やメリット 1
2. 関係人口の活用に向けた手順 2
3. 関係人口には、こういったテーマや人材が想定されるか？ 5

■第2部 先進事例

【分野1 環境・景観保全】

- 事例①「集落応援隊～草刈りによる里山保全～」 6
すすめの学校（新城市黄柳野地区／地域ボランティア団体）
- 事例②「コスプレイヤーと海ゴミゼロチャレンジ」 8
海・みなと・蒲郡実行委員会（蒲郡市／官民による実行委員会）
- 事例③「千年の森（ブナの森）づくり」 10
奥三河自然と歴史にふれあう会（設楽町清嶺地区・名倉地区／地域ボランティア団体）

【分野2 まちづくり・地域おこし】

- 事例④「多くのボランティアが支える空き家片付け大作戦」 12
豊田市の山村地域の自治区・町内会等とおいでん・さんそんセンター
（豊田市の山村地域（足助地区・小原地区・旭地区）／地域団体）
- 事例⑤「地域住民のような頼りになる存在 古戸応援隊」 14
古戸ひじり会（東栄町古戸地区／地域ボランティア団体）

【分野3 歴史・文化・スポーツ】

- 事例⑥「全国から城マニアが集まる 名城古宮城の整備活動」 16
三河古宮城址保存会（新城市／地域ボランティア団体）
- 事例⑦「織田・武田の歴史的決戦の地を守る環境保全活動」 18
設楽原をまもる会（新城市東郷地区／地域ボランティア団体）
- 事例⑧「自然に親しみながらのスポーツを通して奥三河を盛り上げたい」 20
一般社団法人 Damonde（新城市／スポーツツーリズム事業推進組織）

【分野4 産業支援】

- 事例⑨「気軽に働きたい個人と人手不足の農家をマッチング」 22
株式会社アグリトリオ（豊橋市／民間企業）
- 事例⑩「豊川・豊川用水で生まれ、つながりを広げる流域農業」 24
ゆたかわファーム（田原市・東栄町／農業法人）

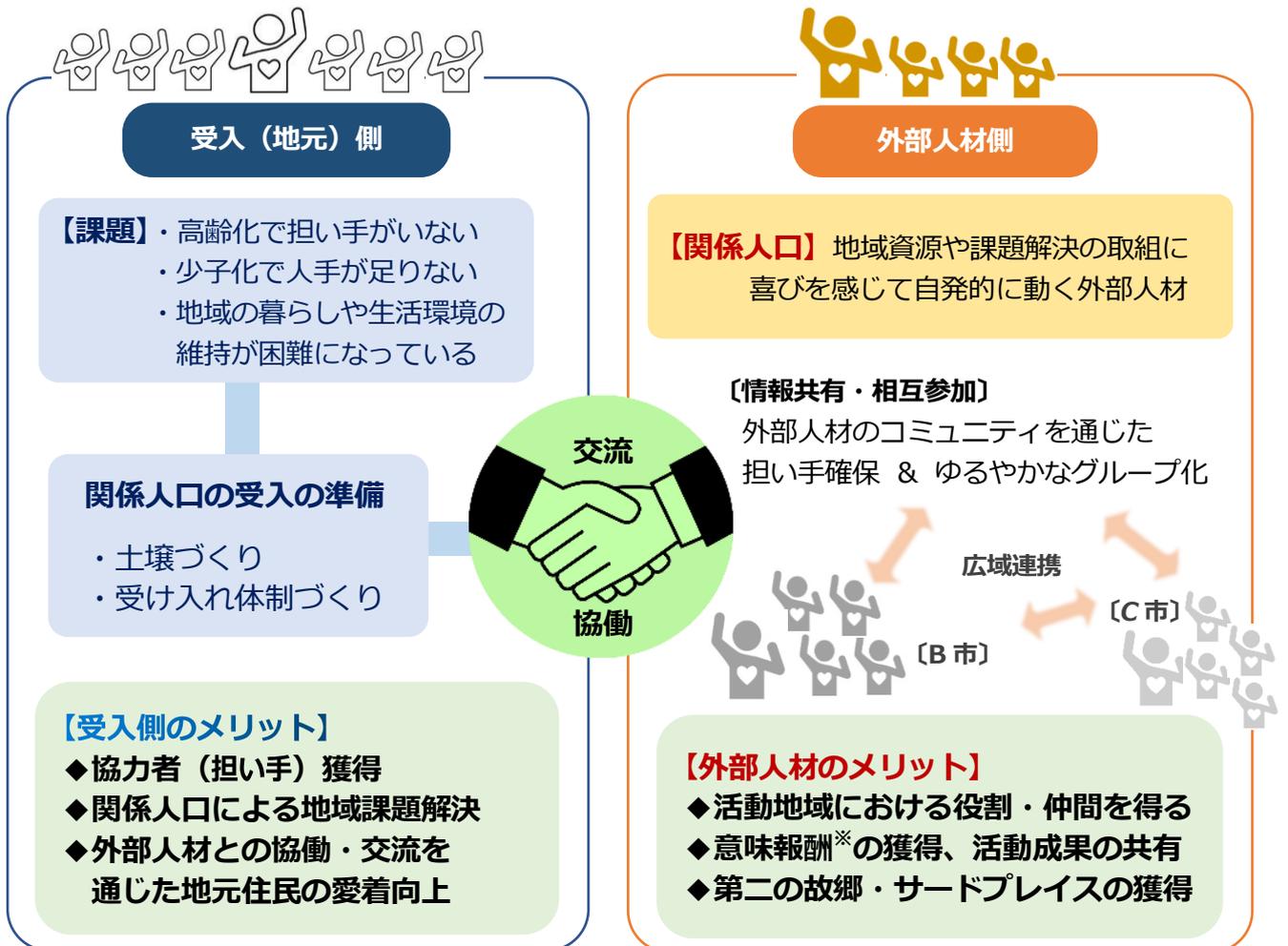
【分野5 関係をつなぐプラットフォーム】

- 事例⑪「福祉体験のマッチングサイトで学生と福祉をむすぶ」 26
株式会社 musbun（名古屋市／学生ベンチャー企業）
- 事例⑨「気軽に働きたい個人と人手不足の農家をマッチング」 22
（再掲）株式会社アグリトリオ（豊橋市／民間企業）

■第1部 関係人口に取り組むメリットや手順について

1. 関係人口を活用する意義やメリット

- ・人口減少・高齢化による地域づくりの担い手不足という課題に対し、「関係人口」が注目されています。地域外部の人材が、地域づくりの担い手として地域の人々と多様に関わる「関係人口」の取組は、受入側には地域課題の解決、外部人材には楽しさややりがい得られ、お互いにメリットが生まれます。関係人口の取組は、地域資源の活用や磨き上げにつながり、地域の魅力も高まります。



※賃金（経済報酬）とは異なり、自己のモチベーション・社会貢献度・自己成長など形のない報酬。

関係人口（外部人材受入）による地域課題解決の成功事例の創出

関係人口（外部人材受入）に取り組む地域の拡大、担い手不足の解消

【地域課題の解決、持続可能な地域づくり】

2. 関係人口の活用に向けた手順

【ステップ①】 土壌づくり

■ 活動の目的や方向性を振り返り、外部人材を受け入れる意義を検討しましょう

- ・ 外部人材を受け入れるためには、関係者でこれまでの活動を振り返り、活動の目的や今後の方向性を確認し、外部人材を受け入れることの意義やメリットを整理し共有しましょう。
- ・ 話し合った結果、外部人材を活用しないという選択肢もありえます。

【全事例共通】

- ▶ 会議や実践を通じた、課題解決や活動の活性化にむけた外部人材の必要性の理解

【事例⑤古戸ひじり会】

- ▶ 外部のサポートを活用した、都市部との交流による地域課題解決の検討

■ テーマ（地域資源や課題）を掘り起こし、その価値や魅力を再評価してみましょう

- ・ 地域の困りごと（マイナス）になっている地域課題、見過ごされている地域資源の価値や魅力（プラス）を再評価してみましょう。
- ・ 再評価する際に、外部人材の助けを借りると効果的です。
- ・ 再評価した結果を関係者と共有しましょう。

【事例⑨株式会社アグリトリオ、事例⑩株式会社 musbun】

- ▶ 敬遠されがちな介護や農作業の価値を再評価し事業化

【事例⑩ゆたかわファーム】

- ▶ 耕作放棄地を水の上下流域の取組として見直す

■ テーマに興味・関心を持つ外部人材（ファン）について調べてみましょう

- ・ 本事例集に掲載された類似の活動を参考に、テーマ・資源に興味・関心を持つ外部人材（ファン）の有無やニーズについて調べてみましょう。
- ・ 先進事例団体に直接問い合わせることも可能です。

【事例②海・みなと・蒲郡実行委員会】

- ▶ コスプレイヤーのニーズやこだわりに着目

【事例⑥三河古宮城址保存会】

- ▶ 全国の城マニアをターゲットに想定

■ 活動内容や独自の魅力、外部人材に期待する役割などを整理しましょう

- ・ テーマ・資源に興味・関心を持つ外部人材（ファン）をひきつける独自の価値・魅力（報酬）、活動の具体的な内容、期待する役割などを整理しましょう。
- ・ テーマに関心を持つ人と一緒に検討すると効果的です。

【事例⑧一般社団法人 Damonde など多数】

- ▶ 外部人材にとって、活動・体験に参加することの価値や喜び、楽しさをわかりやすく提示

【ステップ②】受け入れ体制づくり

■テーマに興味・関心を持つ外部人材（ファン）が活動に参加できる機会をつくりましょう

- ・体験会やイベントなど外部人材に参加しやすい機会をつくりましょう。

【事例⑩ゆたかわファーム】

- ▶有機野菜の販売や会員向け農業・自然体験イベントの開催理念に共感した顧客をファンにする。

【事例⑪musbun】

- ▶楽しい交流・体験事業を通じて、大学生と福祉施設の新たな出会いを提供

■外部人材に「役割」（＝居場所）を提供しましょう

- ・活動を時間単位で区切るなど、意義や手法を再確認し、活動参加者全体の役割を見直しましょう。
- ・役割の分担を見直す際、外部人材をお客さん扱いせず、フラットな関係を築くことを目指しましょう。
- ・役割見直しの検討に外部人材を加えることも効果的です。

【事例①すすめの学校】

- ▶昼食の準備や片付けも参加者と協力しておこなうなど、対等な関係を築く

【事例④おいでん・さんそんセンター他】

- ▶昼食・休憩タイムに会話・交流が生まれるように工夫する

【事例⑧一般社団法人 Damonde】

- ▶医療関係者や行政職員など外部人材の経歴に応じた役割の分担

■受入側と外部人材側の相互の利益を確認し、信頼関係を育てましょう

- ・地元関係者と外部人材が、ともに活動の成果を共有し、喜びや感謝の気持ちをわかちあうことで、受入側・外部人材側双方に価値のある利益（意味報酬・給与など）を実感してもらいましょう。
- ・成果を積み重ね、外部人材に一步一步活動を「自分事化」してもらい、外部人材が地域の担い手（関係人口）化することを目指しましょう。

【事例③奥三河自然と歴史にふれあう会】

- ▶受入側の知識や技術を外部人材の地元の活動に提供

【事例④おいでん・さんそんセンター他】

- ▶空き家の家主、地元自治会、外部人材の「三方よし」の取組により移住者に空き家を提供

【事例⑥三河古宮城址保存会】

- ▶年に1回、活動時間も内容も自由でゆるやかに参加可能。作業後、地元と外部人材で城や歴史を語り合う

【事例⑩musbun】

- ▶自分の得意なことを活かせる活動を通じて、福祉の魅力を知り興味を持つ学生が増加

【ステップ③】活動を続けよう

■外部人材との交流を通じて、受入側の郷土の良さを見直そう

- ・外部人材との協働作業や交流を通じて、受入側のやりがいや生きがい、役立ち感、さらにわがまち（仕事・活動・資源）への愛着や誇りの向上を目指しましょう。郷土への愛着を再認識することにより、心の過疎（自分の住む地域への愛情を失くし、やる気をなくすこと）を食い止めることにもつながります。

【事例⑥三河古宮城址保存会】

- ▶本会の活動がきっかけとなり続 100 名城入りし、市指定史跡となる

■外部人材の口コミや SNS を通じた持続的な外部人材の確保を働きかけましょう

- ・外部人材の口コミや SNS 等を活用して、同じ趣味などを持つ人へアプローチし、持続的な外部人材の確保を目指しましょう。
- ・類似する活動が他にもあれば、その活動団体との情報共有や相互参加の可能性を検討しましょう。

【事例③奥三河自然と歴史にふれあう会】

- ▶多様な環境保全活動団体や個人が参加

【事例⑧一般社団法人 Damonde】

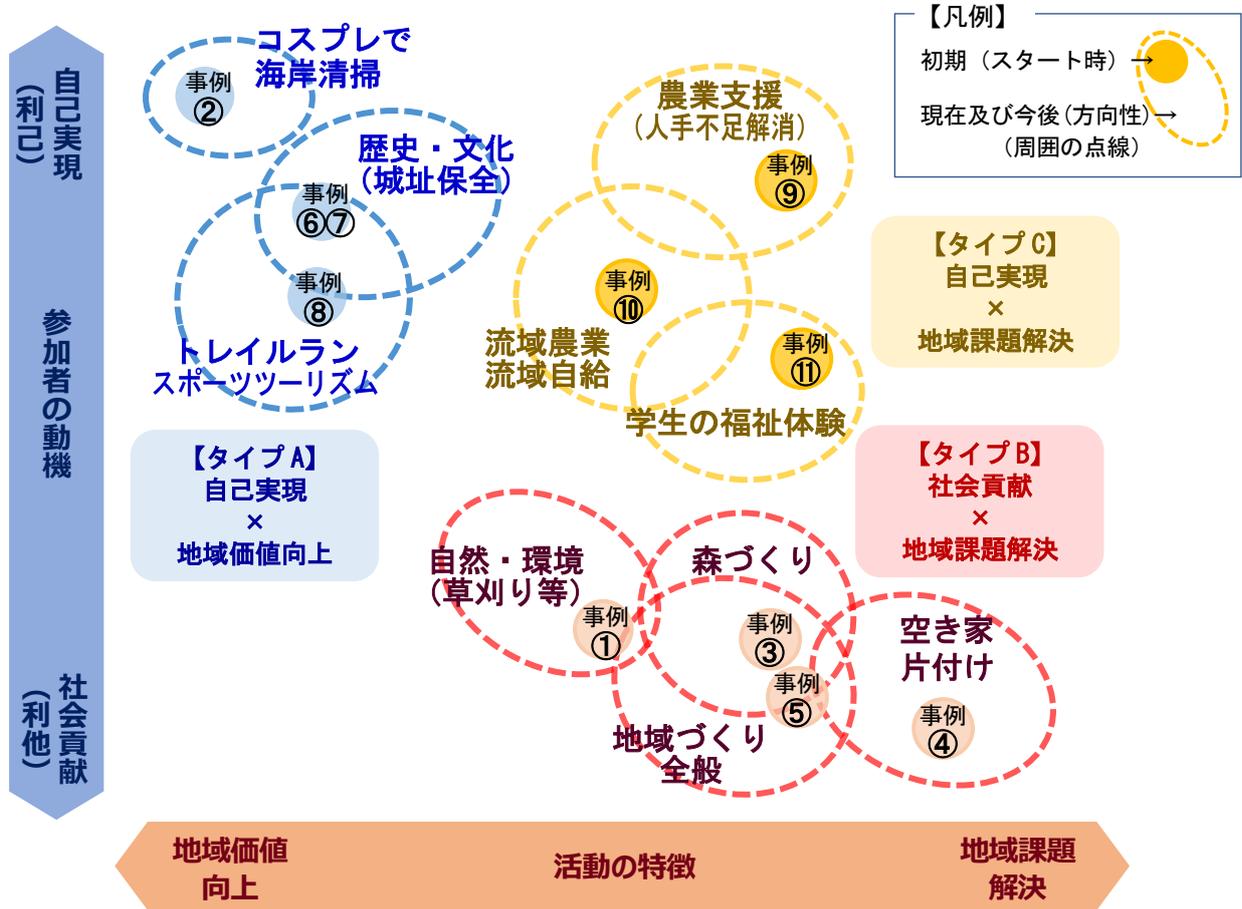
- ▶恒常的な交流拠点を設置し、外部人材や地元住民のつながりを継続

【事例⑩ゆたかわファーム】

- ▶農作業に意欲的な会員に、繁忙期の手伝いをお願いする「ゆたかわ援農隊」を組織

3. 関係人口には、こういったテーマや人材が想定されるか？

- ・本資料で紹介する先進事例を、「参加者の動機」及び「活動の特徴」の2つの観点からそれぞれの特徴を分析すると以下のような3タイプに整理できます。
- ・関係人口に取り組む場合には、この2つの観点を踏まえて、自分たちの地域の特性や活動の目標、テーマ、対象者をイメージしながら進めることをおすすめします。



タイプ	特徴・分野	外部人材の特徴
【タイプA】 自己実現 × 地域価値向上	個人的な興味・関心から始まり、地域資源の価値向上へ発展 ・例：城址保全、コスプレなど ・例：トレイルランなど	共通の趣味などを持つ一定のファン層（ネットワーク化）
【タイプB】 社会貢献 × 地域課題解決	地域課題解決に向けた取組から、賛同する外部人材や組織等の参加による社会貢献活動へ発展 ・例：草刈り、空き家片付け、地域づくり、森づくり	社会問題（を抱える過疎地域等）に関心のある個人、企業、大学など
【タイプC】 自己実現 × 地域課題解決	地域課題解決や地域価値向上の取組をビジネスモデルに発展 ・例：農業支援、福祉体験	社会問題に関心のある個人

■第2部 先進事例

【分野1 環境・景観保全】事例①

タイプB

「集落応援隊～草刈りによる里山保全～」

すすめの学校（^{つげの}新城市黄柳野地区／地域ボランティア団体）

構成員	【地元】黄柳野自治区の役員を含む50～70歳代の地域住民10名 【外部（関係人口）】主に東三河や愛知県内の成人20名程度
マッチングPR方法	○都市と農山村の交流を図る愛知県事業（三河の山里サポートデスク）との連携 ○都市住民向けの交流・体験イベントの開催
取組のポイント	○黄柳野（つげの）の美しい里山の風景を守るため、外部の個人や事業所からも協力者を募り、年5～6回の集落の草刈りを実施している。 ○「お客さん扱い」せず、地元住民と同様に草刈り作業や昼食の準備などを行い集落の一員のように受け入れている。また、バーベキューやタケノコ掘りなどの季節ごとの貴重な体験を提供し、来訪者にとって楽しく居心地のよい居場所となっている。 ○愛知県庁や新城市役所もオブザーバとして事務局機能を支援。



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・新城市南部の丘陵帯に位置する日本の原風景が広がる黄柳野は、地名にもなっているようにツゲの自生地、自生地周辺は環境省指定の「生物多様性保全上重要な里地里山」にもなっている。
- ・平成4年から集落の人口減少や高齢化による担い手不足で、集落の環境保全が困難になってきた。平成6年に地元の有志らが活動団体「すすめの学校」を組織し、25年以上にわたり草刈りや雑木の伐採などの地元の環境保全と美化活動を実施している。
- ・稲刈りや芋ほりなどの農作業体験、コンサートやどろんこ運動会、門松づくりなどの地域の特色を生かしたイベントを実施し、都市住民との交流・体験活動を積極的に行っている。
- ・平成27年には、「三河の山里集落応援隊※」を進め、東三河や愛知県内の事業所や各種団体に幅広く参加を呼びかけ、黄柳野地区の草刈りを実施した。
- ・こうした取組を通じて地域のファン（関係人口）を増やしてきた。里山保全活動の拡充にむけて、市内外の事業所などにも対象を広げ、草刈りなどの集落保全をテーマに絞り活動の見直しを図った。

※集落活動を応援していただける個人・団体に呼び掛けて、草刈り作業やイベントのお手伝いなど三河山間地域の集落等の望む活動とマッチングし、交流しながら、集落機能の維持・活性化につなげることを目的とした活動



【活動概要】

- ・美しい山里を守る草刈りのボランティアとして「三河の山里集落応援隊からはじめませんか？山里の人たちと交流したい！山里に関わりたい！という方も大歓迎！」と呼びかけ、10 数名の参加者が集まり草刈りの応援隊として活動を始めた。
- ・昼食・休憩をはさみ4～5時間ほど、田んぼの土手や茶畑、空家周辺など、2～3か所で草刈り機を使って雑草を刈る作業を行っている。地域の方と初心者がチームを作り、適宜「刈り払い機」の使い方の指導も行うなど、丁寧に初心者をフォローしながら楽しく作業が行われている。

【特色・工夫】

- ・地元住民と同様に草刈り作業や昼食の準備などの仕事を担ってもらい、お客さん扱いせず集落の一員のように受け入れている。
- ・昼食には、ジビエ肉のバーベキューや炊き込みご飯など、地域でとれた山の幸を使い、参加者とともに厨房に立ち、調理や食事、片付け作業を行った。地元の食を楽しみながら「親戚づきあい」のような和気あいあいとした交流を行っている。
- ・さらに、タケノコ掘り、原木シイタケ狩り、芋ほり、栗拾いなどの季節ごとの貴重な体験や、お米や野菜のお土産を用意するなど、楽しく居心地のよい居場所となるように工夫している。
- ・ツツジの剪定、さつま芋の苗植え、原木椎茸用の原木伐倒、玉切り、椎茸の菌打ちなど活動の幅を広げながら、参加者のスキルやニーズの変化を踏まえて活動内容の見直しを図っている。
- ・親子で気軽に参加できる交流体験を組み合わせることで、新しい参加者の発掘にもつなげている。
- ・近年は、起業等で三河山間地域の課題解決に挑戦する「あいちの山里アントレワーク実践者」（県地域振興室）を受け入れている。



【成果と課題、今後の展望】

- ・田舎や田舎暮らしに興味はあるけれど、移住するにはハードルが高いと思われている方も多い。草刈り等の集落の応援を通して、地元の人々の空気感に直に触れることができ、訪問の機会を重ねるごとに少しずつ地域に溶け込み、黄柳野が自分のふるさとのような場所になっている参加者も多い。
- ・環境省では、さまざまな命を育む豊かな里地里山を、次世代に残していくべき自然環境の一つであると位置づけ、平成 28 年 3 月に「生物多様性保全上重要な里地里山」（500 箇所）を選定。この重要里地里山に黄柳野が選ばれている。（愛知県内 11・市内 3 か所）
- ・地域住民の高齢化により、田畑の管理ができない家庭も増加し、すすめの学校に管理を依頼する人も多い。
- ・メンバーの高齢化による減少で、活動の規模が縮小しているのが現状。
- ・里山保全という地域貢献活動の意義や魅力を、外部の事業所や市民団体、大学などに積極的に発信し、人材発掘やマッチングの仕組みを再検討することが求められる。



（写真は平成 27 年 6 月現在）

問合せ・連絡先

すすめの学校 校長 安形竹志、主任 原田和通、教頭 原田定充

■電話 090-7030-1188 ■e-mail sada-tuge@tees.jp

■<https://www.facebook.com/profile.php?id=100064869813464> (FB ページ)

■活動場所 黄柳公民館（新城市黄柳野字丸淵 1 3 4 - 1）

「コスプレイヤーと海ゴミゼロチャレンジ」

海・みなと・蒲郡実行委員会（蒲郡市／官民による実行委員会）

構 成 員	【地元】ラグーナテンボス、株式会社 WCS（コスプレ団体）、蒲郡市（事務局） 【外部（関係人口）】全国から集まったコスプレイヤー50名
マッチング PR 方法	○コスプレイベント「ラグコス 2022」と併催で実施
取 組 の ポ イ ン ト	○コスプレイベントと連携し、美しい海を次世代へ引き継いでいくため、「海・みなと・蒲郡 ラグコス 2022～コスプレイヤーと海ゴミゼロチャレンジ～」を開催。 ○美しくなった海や砂浜で人気コスプレイヤーとの写真撮影会の開催や、ラグナシアで使えるクーポン券やオリジナルエコバックのプレゼントなど、コスプレイヤーが参加したくなる魅力的なコンテンツを充実させて効果的に集客。



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・地球温暖化が進む中、国においては2050年カーボンニュートラルが宣言され、蒲郡市においても令和3年3月に「ゼロカーボンシティ」を宣言している。さらに、持続可能な地球と持続可能な経済・環境・社会を実現していくため、“サーキュラーシティ”を目指していくことを表明するとともに、公民連携によるSDGsまちづくりにも積極的に取り組んでいる。
- ・近年、海岸への漂着ゴミや、マイクロプラスチックなどの海洋ゴミが社会問題化するとともに、資源の再利用などの循環型社会づくりが課題となっている。行政とともにボランティア団体や地域組織（常会）、企業、学校などが定期的に海岸清掃を行っているが、活動への関心や参加を喚起することが難しく、一般市民への活動の広がりが乏しい状況にある。
- ・そこで、民間企業のコスプレイベントと連携し、発信力の高いコスプレイヤー（漫画やアニメ、ゲーム等に登場するキャラクターになりきる人）など市外からの来訪者と連携した清掃活動を行った。

【活動概要】

- ・世界コスプレサミットの開催に合わせ実施しているオールナイトコスプレイベント「ラグコス 2022」と連携し、美しい海を次世代へ引き継いでいくことを目的として、「海・みなと・蒲郡 ラグコス 2022（海と日本 2022）～コスプレイヤーと海ゴミゼロチャレンジ～」を令和4年7月に開催。
- ・コスプレイベントと併催した結果、全国からコスプレイヤーが50名集まり、写真映えする魅力的なロケーションとなる「美しい海」で撮影がしたいという思いのもと、大塚海浜緑地周辺の清掃活動に参加してもらった。
- ・このイベントは、次世代へ海を引き継ぐために、海を介して人と人とがつながる“日本財団「海と日本プロジェクト」”の一環で開催。（「海と日本 PROJECT」は日本財団、総合海洋政策本部、国土交通省の旗振りのもと、オールジャパンで推進しているプロジェクト。）

【特色・工夫】

- ・美しくなった海や砂浜での人気コスプレイヤーとの記念撮影、鈴木寿明蒲郡市長の来訪、キッチンカーの出店、ラグナシアクーポン券やオリジナルエコバックのプレゼントなど、官民が一体となった集客を行った。
- ・コスプレイヤーの中には、自身の撮影で使用するロケーションが汚れないよう、日ごろから率先してごみ拾いを行っている方も多く、環境意識と SNS 発信力が高いコスプレイヤーとともに、海洋ごみ削減の活動を実施することで、市民への効果的な啓発にもつながっている。
- ・海岸清掃終了後には、フェスティバルマーケットに設置した分別用ゴミ箱に集まったごみ 10 kgの「ゴミ分別体験」も行った。ごみの中にはプラスチック片やビニール袋といったものもあり、清掃活動だけではなくどのようなごみが捨てられているのかも学んでもらった。



【成果と課題、今後の展望】

- ・参加者の中には 10 歳のコスプレイヤーもいて、「空き缶やペットボトルや吸い殻を拾った。環境を守る活動にまた参加したい」といった感想も聞かれるなど、参加者は積極的に取り組み、循環型社会を目指して再利用できるものは何かを学ぶ機会となった。
- ・以前、ヨットの大会開催時に、そこに参加した学生とともに海岸清掃活動を行うなどの取組を行ったこともあり、今後はマリンスポーツなどの大会と合わせて実施することを考えている。
- ・また、竹島周辺で各種イベントを開催しており、生涯学習の一環として海岸や流木の工作イベントなどの学習イベントもある。市内外から参加している出展者やお客さんに、竹島の周辺の海で清掃活動に協力してもらうことが期待できる。ただし、イベントを絡めすぎると運営の負担も増えるため検討が必要である。
- ・春と秋のクリーンキャンペーンは、市内 5 か所（ラグーナ、竹島、市民会館、形原、西浦）で開催しており、今後はこうした活動と絡めて実施することも考えている。

(参考・出典：「日本財団 海と日本 PROJECT」HP、「海・みなと・蒲郡 ラグコス 2022」HP)

問合せ・連絡先

蒲郡市企画部企画政策課（海・みなと・蒲郡実行委員会事務局）

■電話 0533-66-1162

■<https://www.umiminato-gamagori.jp/lagcos/index.html>（ラグコス 2022）

■開催場所 大塚海浜緑地（ラグーナビーチ）周辺

「千年の森（ブナの森）づくり」

奥三河自然と歴史にふれあう会

(設楽町清嶺地区・名倉地区／地域ボランティア団体)

構成員	<p>【地元】奥三河在住者 13 人</p> <p>【外部（関係人口）】ながくて里山クラブ（23 名の構成員で長久手の農村景観と伝統文化を残す活動をしている。）</p>
取組のポイント	<p>○10ha のブナの森（千年の森）の保全・活用活動を長久手市のボランティア活動団体などの参加によって進めている。</p> <p>○「千年の森」の豊かさとその取組に魅力を感じた人たちが定期的に訪れ、散策道づくりや伐採後の整理、ほだ木づくりや薪割り、植林のための地ごしらえなどに主体的に取り組んでいる。</p> <p>○20 数年の活動の中で公的な補助金をほとんど受けることなく、外部人材との連携・協働を通じて、森からの収益で経済的に自立した取組を持続的に進めている。</p>



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・愛知県内で数少ない貴重なブナが生息する設楽町の段戸^{だんど}裏谷^{うらや}原生林は、冷厳なブナの森が残され「きららの森」として多くの人に親しまれている。しかしながら、きららの森のブナは寿命を迎えているといわれ、それに地球温暖化が追い打ちをかけ次世代の木が減少している。
- ・そこで、ふるさと観光ガイドや環境省の自然公園指導員、愛知県文化財などの活動を奥三河で行っていた加藤博俊さんが代表となって、平成 10 年 4 月、奥三河地域在住者 13 人で「奥三河自然と歴史にふれあう会」を設立。段戸山のブナから種を採取し苗木を育て段戸山に戻す試み「千年の森（ブナの森）づくり」などの活動をスタートさせた。
- ・会として特に宣伝活動は行って来なかったが、人づてに千年の森を知った個人や団体が自然観察や山歩きや植林活動などに訪れるようになった。
- ・その1つが、里山の修復及び創成や伝統文化の継承、異世代間の交流、里山講演会の企画などの活動を長久手市内で行っている「ながくて里山クラブ」である。散策道づくりや伐採後の整理、ほだ木づくりや薪割り、植林のための地ごしらえなどの森づくりに主体的に参加している。

【活動概要】

- ・「千年の森」は段戸山の一角にある標高 900mほどの沖ノ平にある。会では 3.5ha の森を取得して森づくりをスタート。現在、この森は 10ha を超え、ブナの苗木づくり、地元の 4 つの小学校の小学生による植林活動、自然の力エデを利用したメープルシロップや樹液採取体験ツアー・山歩きや自然観察など多様に利用されるようになっている。



- ・千年の森づくり以外にも、会ではさまざまな活動を行っている。北設楽の希少動植物の記録調査や岩石と鉱物の採取記録調査、北設楽の城砦現況実測調査や文化財保護活動、巨木調査、毎月1回以上の自然と歴史ガイド、奥三河のメープルシロップの開発など、活動範囲は非常に幅広い。
- ・ながくて里山クラブは、ほぼ月2回の頻度で10名程度のメンバーが「千年の森」に訪れて前述のような様々な森づくりに、楽しみながら主体的に参加している。また、毎年継続的に開催される小学生による植林のサポートも行っている。
- ・ながくて里山クラブ以外にも、都市部で環境保全活動を行っている市民団体やボーイスカウト・ガールスカウト、会社仲間など多種多様な都市住民がリピーターとなって千年の森を訪れるようになっている。

【特色・工夫】

- ・自然発生的な出会いをきっかけに、その後の長年の連携・協働の積み重ねによって地元と外部人材のWin-Winの関係が創出されている好例である。
- ・メープルシロップの生産やしいたけ栽培、アロマオイルの生産、森の木々の葉を原料としたお茶（クロモジ茶）など、10haの森の恵みでいかに自活できるか、1つの家族が10haの森でいかに経済に自立できる暮らしができるか。代表の加藤さんは、千年の森をその実証実験の場として位置づけて活動を積み重ねている。
- ・自然共生型・未来志向型の自由で開放的でゆったりとした千年の森の取組が、自然を志向する多くの都市住民の共感を呼び、こうした人たちが繰り返し訪れる場になっている。
- ・駐車場にトイレと休憩スペースの他、平成29年には喫茶を兼ねた拠点小屋「木まぐれ」もオープンさせている。

【成果・課題と今後の展望】

- ・会の主力メンバーが60歳代後半や70歳代となっている中で、ながくて里山クラブは大きな戦力になっている。同時に、ながくて里山クラブにとっては、本場の森づくりの実践を通じて学んだ知識や技術を長久手での活動に活かしたり、代表の加藤博俊さんを講師に招いた講演会を通じて長久手における里山づくりの普及啓発を行うなど、多くのメリットを得ている。
- ・20数年の活動の中で、都市部の団体・個人が植樹活動などに参加することで、千年の森づくりは着実に進んでいる。また、地元の4つの小学校の植林活動を始めてから20年近くが経過し、これまで数多くの小学生が千年の森に関わり成人した子ども数多くいる。
- ・こうした子どもたちや若者、設楽町に移住したいという人たちが、森に関わり、森の恵みで豊かな暮らしも経済的に自立した暮らしができるようにしていくこと、その社会実験を実装化させていくことが大きな目標であり、今後の課題・展望となっている。

問合せ・連絡先

奥三河自然と歴史にふれあう会 代表：加藤博俊さん

■電話 0536-62-1456（設楽測量設計株式会社内）

■活動場所 千年の森（愛知県北設楽郡設楽町西納庫字沖ノ平2-2）

「多くのボランティアが支える空き家片付け大作戦」

豊田市の山村地域の自治区・町内会等とおいでん・さんそんセンター

(豊田市の山村地域(足助地区・小原地区・旭地区) / 地域団体)

構 成 員	<p>【地元】足助地区明和自治区・明川町(自治会) / 小原地区大平自治区・大平自治区若者定住委員会 / 旭地区敷島自治区定住促進部・加塩町町内会 / 小原地区道滋自治区・小原地区定住促進委員会</p> <p>【外部(関係人口)】豊田市内外に居住する都市住民や移住希望者、豊田信用金庫ボランティア、大学生ボランティア・中京大学一般公募ボランティアなど、各回20数名から最大70名の参加</p>
取 組 の ポ イ ン ト	<p>○空き家が増えているにもかかわらず「家財等の片づけ」が最大の理由になって、移住定住のための空き家が抛出されていけない地域が多い。</p> <p>○こうした課題を解決するため、地元住民を中心に、都市居住者等の外部人材との協働で、空き家に大量に残されている家財等を片付け、空き家情報バンク※への登録につなげていく「空き家片付け大作戦」を実施している。</p> <p>※豊田市の山村地域等に存在する空き家について、賃貸もしくは売却を希望する空き家の所有者と、田舎暮らしを目指す移住希望者が出会うよう、市が空き家の情報提供と入居者の募集をするしくみ。</p>



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・「豊田市の山村地域における人口減少・少子高齢化の波を少しでも食い止め、空き家の窓に明かりを灯したい」。そんな想いを背景に、おいでん・さんそんセンター(都市と山村の支え合い・協働的交流をコーディネートする中間支援組織。平成25年8月に豊田市が開設)では、「空き家にあかりを!プロジェクト」を平成28年9月から本格的にスタートさせた。
- ・このプロジェクトは、過疎から脱却するため、空き家を活用した移住促進を地域住民が主体になって進めていく機運を盛り上げ、行動を喚起することに意図がある。
- ・具体的な事業の一つとして、空き家の活用の最大のネックの1つになっている「家財等の片付け」を家主や地域住民、移住希望者等と行う「空き家片付け大作戦」を行っている。
- ・山村地域では空き家は多いが、貸したり売ったりする物件が出てこない実情がある。大きな理由の一つが「家財等の荷物が片付かない」である。
- ・こうした問題を解決するため、個人財産である空き家を“地域共有の資産”と捉え、地元の自治区や町内会の主催で、空き家の家財等の片づけを協働で行う「空き家片づけ大作戦」を実施。地域住民を中心に、都市住民や企業、大学生ボランティア等の外部人材が参加している。



【活動概要】

- ・これまで、足助地区1物件、小原地区4物件、旭地区1物件を対象に「空き家片付け大作戦」を実施。総勢70名もの大人数の参加のもとで空き家片づけを行った回もあった。
- ・参加者は多様で、豊田市の都市部や豊田市外に住んでいる住民、移住希望者（中には、遠く横浜市から参加）、大学生ボランティア・中京大学軟式野球部の部員のほか、空き家片付けの個人ローン制度を商品化した豊田信用金庫の社会貢献事業としての参加もあった。
- ・空き家片付け大作戦は、対象となる空き家を地元自治区等で発掘し、空き家片付けイベントを企画。チラシやHP、SNSなど多様な媒体を使って参加者を募集している。
- ・1日をかけて、「残す物」、「燃やすごみ」、「金属類」、「埋めるごみ」、「粗大ごみ」などに分別しながら家財等の整理・搬出を行う。排出されたごみ類は、軽トラック30台以上に及ぶケースもあった。

【特色・工夫】

- ・途中、昼食や休憩をはさむことによって、地元住民と参加者との会話・交流が自然につながるよう工夫している。実施日の最後には、参加者アンケートや振り返り会を行い、参加者の感想を集めることで次につながるような工夫をしている。
- ・抛出された家財等のうち、まだ使えそうなものを分けて、家主さんの了解の上で「無料譲渡会」をするなどの工夫もみられる。
- ・空き家片付け大作戦の参加者募集に際しては、①お宝発見、②断捨離スイッチが入る、③田舎暮らしのイメージがつかめる、④地域の人と仲良くなれる、⑤社会問題を解決し汗も流して心もすっきり“参加の五徳”を宣伝している。参加者からは、「皆さんと一緒に汗を流すことができ楽しかった・すっきりした」、「貴重な体験になった」、「移住したいという気持ちが高まった」、「欲しい家財が手に入った」といった前向きな声が寄せられている。

【成果・課題と今後の展望】

- ・片付けを行った物件は、豊田市空き家情報バンクに登録される。また、「大見本市」や「暮らしの参観日」と称した空き家の見学会&交流会を地元主催で開催し、移住定住につなげている。
- ・一方で、依然として「空き家に残されている大量の家財等を片付けることができない」という理由から空き家の有効活用が進んでいない地域が多い。家主と移住定住を進めていきたいという自治区等の地元組織、参加者の3者にメリットのある“三方よし”の空き家片付け大作戦のような取組を、関係人口・交流人口を巻き込みながら横展開していくことと、社会実験の段階から各地域が自立して展開していく実装段階に発展させていくことが求められる。

問合せ・連絡先

おいでん・さんそんセンター

- 電話 0565-62-0610(直通)、0565-62-1456(豊田市足助支所2F)
- <https://www.oiden-sanson.com/>
- 活動場所 豊田市の山村地域

「地域住民のような頼りになる存在 古戸応援隊」 古戸ひじり会（東栄町古戸地区／地域ボランティア団体）

構 成 員	<p>【地元】古戸地区住民（世帯から1名を会員とする） 役員は会長、副会長、監査、庶務、会計、実行委員の13名</p> <p>【外部（関係人口）】出身者、古戸おいでん塾参加者など15名程度（古戸応援隊）</p>
マッチング PR 方法	<p>○愛知県のモデル事業としてPR・集客</p> <p>○農作業や花祭りの見学、伝統文化継承などの交流イベントを通じた人材発掘</p>
取 組 の ポ イ ン ト	<p>○地域の担い手不足で、地区住民だけで古戸の自然環境の維持・保全、花祭りなどの伝統文化の継承などが難しくなったため、交流・関係人口、移住・定住者などを確保し、これら地域課題の解決につながる活動を年5～8回程度実施している。</p> <p>○古戸ひじり会では、古戸応援隊活動、交流イベント、栽培した農産物の販売などを通じて、担い手の確保と活動資金の確保を図り、地域課題の解決につなげている。</p> <p>○活動資金の一部は東栄町の活動団体補助を得ている。また、活動のアドバイス・コーディネートを愛知県交流居住センターの受入集落支援事業のアドバイザー派遣を利用して実施。</p>



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・東栄町北西部に位置する古戸地区は、近年は過疎化、少子高齢化などにより、耕作放棄地の増加、森林の放置、花祭りの舞い手不足などの問題が生じていた。今後の地区に危機感を抱いた地区住民が中心となり、平成19年度に愛知県「三河山間地交流居住推進事業」のモデル地区となって、都市部との交流を通じて移住へとつなげていくための取組を進めることになった。
- ・平成20年4月、古戸の森林や農地等の環境保全、伝統文化継承などの課題解決などに取り組み、地区の活性化を図る組織として、当時の地区住民80名が会員の「古戸ひじり会」を設立した。
- ・平成20年5月から、都会から参加者を募り、交流から移住へとつなげていく「古戸おいでん塾」を開講。20～30名程度の塾生と一緒に、耕作放棄地の解消と美しい景観づくりに向けた「そばづくり活動」等の交流イベントを年7～8回程度実施した。
- ・5年間の古戸おいでん塾を通じて、一定数の塾生が地区住民と同様にスタッフ側で活動するようになるなど地区住民のような存在になってきた。今後は、移住促進だけでなく、地域課題の解決に向けて取り組む人材を確保し、持続的に活動を行っていくことが重要であると気づいた。
- ・そこで、平成25年からは「古戸おいでん塾」を見直し、都会の人の力を借りて古戸ひじり会と一緒に地区の活動に取り組むボランティアの団体として「古戸応援隊」を立ち上げた。

【活動概要】

- ・古戸応援隊のメンバーは、古戸おいでん塾の塾生だったメンバーをはじめ、古戸の出身者、新規メンバーなど総勢 15 名が登録し、古戸ひじり会と一緒に年 5～8 回程度活動を実施している。
- ・古戸応援隊のメンバーは、名古屋市、春日井市、東海市、岡崎市、豊川市、浜松市などから来ており、年齢は概ね 30 歳代～70 歳代の男女である。
- ・古戸おいでん農場を中心に、天狗ナスやとうもろこし、サツマイモなどの栽培や収穫体験イベントの開催、草刈り作業など、年間を通じ、古戸ひじり会のメンバーと一緒にやっている。
- ・空き家の家財道具片付け、天狗ナスの出張販売、古戸おいでん農場の獣害対策の柵の設置など、多様な活動にもチャレンジしている。



【特色・工夫】

- ・散策路づくり、散策イベントの開催など、古戸の魅力づくりや紹介を行うとともに、白山祭りや花祭の見学と手伝い、移住促進、伝統文化継承などの活動も行っている。
- ・古戸応援隊の事務局は地区在住の元役場職員が務め、応援隊メンバーへの連絡・調整を行っている。最近では LINE を通じた情報発信、情報交換を行うようになり、事務局の負担の軽減が図られている。
- ・古戸ひじり会および古戸応援隊の活動には愛知県交流居住センターからコーディネーターが派遣され、活動の企画・運営支援、両団体のコーディネート、かわら版の作成による活動の記録及び情報共有を行うなど、活動を円滑に進めるためのサポートを行っている。

【成果と課題、今後の展望】

- ・平成 20 年度から 15 年間にわたり古戸ひじり会の活動が行われ、遊休農地の解消、農地の保全、桜やモミジ植栽、村行の七滝の整備などの環境保全、景観づくりに貢献している。また、古戸散策マップを使って散策している人もあり、古戸の環境への関心は高まっている。
- ・この活動が契機となり、東栄町内に数世帯が移住、古戸地区内に家を購入した世帯が 1 世帯ある。
- ・継続した都市部との交流活動が評価され、平成 30 年度には古戸ひじり会の活動が愛知県地域づくり活動の表彰を受けている。
- ・古戸ひじり会も古戸応援隊もメンバーの高齢化が進んでいる。活動を継続していくためには、若手・中堅メンバーの参加など、新たなメンバーの確保が必要である。
- ・農産物の販売や交流イベントでの参加費徴収など、自主財源を確保するための取り組みを引き続き進めていく必要がある。
- ・交流人口から関係人口へ、関係人口から移住・定住へとつなげていくため、空き家を確保し、活用をしていくなど、移住・定住に向けた受皿や受入れ体制も引き続き検討していく必要がある。

問合せ・連絡先

古戸ひじり会 会長 初澤宣亮さん

(事務局：東栄町観光まちづくり協会 事務局長 伊藤明博さん)

■電話 0536-76-1780 (事務局)

■活動場所 古戸おいでん農場 (東栄町大字振草字古戸日蔭地内)

「全国から城マニアが集まる 名城古宮城の整備活動」 三河古宮城址保存会（新城市／地域ボランティア団体）

構 成 員	【地元】10～15名 【外部（関係人口）】10～15名
マッチング PR 方法	○お城の整備不足という「共通課題」を抱えた人同士で協力し活動の中核を担う ○「城好き」という共通点を持つ人同士が協力し、活動範囲が広がる ○歴史情報や活動の様子をブログで発信
取 組 の ポ イ ン ト	○年1回（10月中旬）、休日の午後に地元内の理解ある方と地域外から「城マニア」が集まり、15名程度で1時間半程度清掃活動を実施している。 ○城好きや歴史に興味のある人にとって、お堀の中に入る、これまで草で見られなかった場所がみられるようになるといった、通常の見学ではできない貴重な体験の場として捉えられている。 ○地元内外の「城マニア」が集まっているため、会話が自然に生まれ、楽しい雰囲気での活動ができている。 ○参加者の忙しさなどを考慮すると、年1回程度のゆるやかな活動が適切。 ○木立により陽が入らないため、年1回の整備で見学に支障がないものの、巨大な城のため城全体を整備するには、さらなる資材や人員が必要となっている。

【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・平成24年に地域資源を見直そうと地元青年会議所が草刈りイベントを企画した。イベントは1回限りであったため、参加者から「整備活動を継続したい」との声があがり、地元内外の有志が核となって活動を引き継ぎ、今に至る。
- ・こうした活動も評価され、日本城郭協会が平成29年に定めた、「続日本100名城」に選ばれた。平成30年には、市指定史跡にもなり年間1万5千人～2万人が来訪している。戦国時代の城郭がほぼ完全な状態で残されていることから、古宮城の貴重さを理解した訪問者が増えている。



【活動概要】

- ・毎年10月の第3土曜日の午後1時30分から午後3時までの1時間半、草刈りや歩道整備などの活動を行っている。
- ・活動開始時から地域外の担い手と共に活動をしていた。地域外からの参加者は、活動当初は、古宮城を研究対象にした大学教員やそのゼミ生などが参加していたが、活動が続くうちに城の来訪者やSNS等に掲載された活動状況を見た方が参加するようになり、定着している。

- ・地元内は60代～70代、地元外は30代～40代の参加者が多くを占めている。地元外からは、新城市内の他地域、愛知県内の他市町村や、岐阜県、三重県、静岡県など東海3県の参加者が多いが、新潟県からの参加者もいる。
- ・古宮城の地権者の方々からは環境整備が進むことについて理解をいただいている。また、城の来訪者も見やすい状況を喜ぶ声がネット上で見られる。

【特色・工夫】

- ・活動時間内に来ていただければ、活動する時間は参加者の自由となっており、途中参加、途中退出が可能なことを明示して募集をしている。
- ・参加者の忙しさなどを考慮すると、年1回の開催が適切と考えている。
- ・草刈り機など整備活動に必要な機材は参加者が各自で持ち寄り、消耗品や燃料費などは各自負担となっている。また、交通費も参加者の各自負担となっている。地元（主に保存会の会長）からお茶やお菓子の振る舞いがある。
- ・参加者がお菓子を持ち寄ることも増えている。長年参加している方同士は久々の再会を喜び、共通の話題もあるため会話が弾んでいる。内と外の人との関係性はフラット。
- ・最初から地元と外で協働して立ち上げていることから、続100名城でありながら地域外の方も気軽に参加できる。
- ・参加したボランティアがSNS等で活動を情報発信することで、さらなる地域外からの新たな参加者が現れる状況となっている。



【成果と課題、今後の展望】

- ・本会の活動が、続100名城に選定された理由の一つと聞いている。また、国指定史跡になれると言われながらも長らく未指定であったが、続100名城入りをきっかけに市指定史跡となり、将来に渡り史跡が保存されることとなった。
- ・来訪者は一度訪問して二度目はないことが多いが、活動が再訪の機会を作っている。また、長年活動を続ける中で参加者同士の交流も生まれ、他団体の史跡保存活動へ参加するなど波及する動きもある。
- ・木立により陽が入らないため、年1回の整備で見学に支障がない。しかし、巨大な城のため、城全体を整備するには、さらなる資材や人員が必要となっている。



問合せ・連絡先

三河古宮城址保存会 会長 原田 純一

■電話 0536-37-2336

■活動場所 古宮城（新城市）

「織田・武田の歴史的決戦の地を守る環境保全活動」

設楽原を守る会（新城市東郷地区／地域ボランティア団体）

構 成 員	<p>【地元】新城市東郷地区 17 区と地元の個人会員など約 300 人</p> <p>【外部（関係人口）】名古屋や岡崎、新城市内在住者 数名</p>
取 組 の ポ イ ン ト	<p>○織田・徳川連合軍と武田軍の歴史的決戦の地「長篠・設楽原古戦場」をフィールドに 40 数年にわたって古戦場の景観と史跡の保全活動、古戦場の学習・研究活動、「設楽原決戦場まつり」の開催、「長篠・設楽原鉄砲隊」の活動支援など様々な活動などの活動を展開している。</p> <p>○会の実働メンバーの高齢化が課題であることから、活動の一つである馬防柵再現とその保全を、市内外のボランティアを募集する形で実施する試みをスタートした。</p> 

【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・織田・徳川連合軍と武田軍の歴史的決戦の地「長篠・設楽原古戦場」を愛し、40 数年にわたって設楽原の保存と馬防柵の再現などの活動を展開している団体が「設楽原を守る会」である。
- ・戦国時代の生き証人であった古戦場のシンボル「大松小松」の枯死、「長篠の戦い四百年祭」実施、さらに黒澤明監督の映画「影武者」の戦いの場面で 400 年前の古里の風景が再現されていたこともきっかけとなり、改めて古戦場の里を考える機運が盛り上がった。
- ・このことを背景に、昭和 55 年に会を結成。会員数は現在約 300 人。会員構成は新城市東郷地区 17 区と個人会員の他、平成 30 年には中学生等を対象にしたジュニア会員制度も誕生。

【活動概要】

- ・これまで、馬防柵再現とその保全、地域の景観と史跡の保全活動、古戦場の学習・研究活動、鉄砲隊結成と「設楽原決戦場祭り」の開催など様々な活動を進めてきている。
- ・戦国時代に最強と恐れられていた武田の騎馬軍団に対抗するため、織田信長が考え出した作戦とされている「馬防柵」。その再現及び保全は、会の代表的な活動の 1 つになっている。
- ・再現にあたり古い文献や論文を調べ、再現場所や柵の形状や作り方などの研究を重ね昭和 56 年に作業計画書を作成。3 回の準備会を経て、地元山林の間伐材を使用して「北側馬防柵」を整備。2 年後「南側馬防柵」を整備して、全長約 100m の馬防柵が完成した。
- ・表皮をはぎ取った細丸太に防腐剤を塗ったヒノキ材の柵は、経年劣化するため定期的に改築作業をしている。また、馬防柵周辺の草刈り作業は、夏場を中心に数回実施している。
- ・これらの作業は重労働であり、実働会員の高齢化が進み、今後の活動継続が課題になりつつある。
- ・このため、今は防腐剤を注入加工をした材木を購入するとともに、馬防柵の改築作業に小型重機を導入するなど、作業の省力化を図っている。

- ・令和4年10月に、市内外の戦国歴史好きや草刈り好きの人にPRし、こうした方々の参加のもとで馬防柵周辺の草刈りなどの環境保全活動の第1弾を実施。新城市内と名古屋市から計2名がボランティアとして参加し、総勢30数名で刈り払い機による草刈りや草集めなどの作業を行った。
- ・また、第2弾として同年12月の馬防柵の修復作業でも、ブログやSNSなどで市内外の人たち向けに情報発信をして参加を呼び掛け、草刈り作業に参加した2名に加えて、名古屋城ボランティアガイドの女性2名（名古屋在住、三重県在住）と岡崎市や静岡県内に住んでいる男性2名がボランティアとして参加。会の方々と歴史談義を楽しみしながら馬防柵の付け替え作業に汗を流した。

【特色・工夫】

- ・第1弾の草刈りに参加した2名と会のメンバーとの出会いは、愛知県東三河総局新城設楽振興事務所が主催した「歴史をきっかけとする賑やかな縁づくり」講演会。会のPRブースで連絡先を交換し、その後、馬防柵の草刈り案内を受けたことをきっかけに参加した。
- ・第2弾の馬防柵の修復作業には、第1弾の活動が楽しく感銘を受けたこの2名がSNSで情報拡散し、それに共鳴した古宮城（新城市作手地区）の保存活動にも顔を出している歴史・城マニア4名が活動に参加するに至った。
- ・“参加者がまた新たな参加者を呼ぶ”という歴史・城マニアネットワークの好循環により新たなボランティア参加者が生まれている。
- ・開催当日も特に目立った工夫をしているわけではない。ただ、作業開始の前の会長あいさつでボランティア参加者を紹介したことにより、その後の地域住民とのコミュニケーションにつながり、他愛もない会話の中から歴史談義が自然に生まれている。



【成果・課題と今後の展望】

- ・会の主力メンバーはほぼ全てが高齢者であり、この価値ある古戦場の保存活動をいかに後世に受け継いでいくかが大きな課題になりつつある。
- ・市内外の外部人材との協働作業はまだ緒に就いたばかりであるが、ボランティア参加者にとって楽しく、やりがいと満足度につながるような取組となっている。会のメンバーにとっては、長年積み重ねてきた活動が、非常に意味深く価値ある楽しい活動であるという再発見につながりつつある。
- ・長篠・設楽原古戦場ファンの拡大、ひいては、持続的な活動を支える関係人口の形成につなげていくことを展望し、令和5年度においても馬防柵周辺の草刈り作業や馬防柵の修復作業も市内外のボランティア参加による協働作業として実施する予定である。

問合せ・連絡先

設楽原を守る会 代表：今泉研吾

■電話 090-4868-6111 （馬防柵担当事務局：中嶋和雅）

■活動場所 設楽原（新城市大宮字清水地内）

「自然に親しみながらのスポーツを通して奥三河を盛り上げたい」

ダモンデ
一般社団法人Damonde（新城市／スポーツツーリズム事業推進組織）

構 成 員	<p>【地元】一般社団法人 Damonde（役員：2人）</p> <p style="padding-left: 20px;">*後援・協力団体：新城市・新城市教育委員会・新城市観光協会、 一般社団法人奥三河観光協議会、愛知県民の森・湯谷温泉発展会</p> <p>【外部（関係人口）】東三河地域内外に居住するスポーツボランティア（受付・コース内選手誘導・チップ回収・駐車場等の一般ボランティア、救護ボランティア）</p>
取 組 の ポ イ ン ト	<p>○「DA MONDE TRAIL」は、平成 27 年よりスタートし、毎年春・秋の2回開催する奥三河を代表するスポーツイベントである。</p> <p>○新城市や地元の観光関係団体、地元住民など、奥三河で暮らしている人々による企画・運営で大会運営は進められている。</p> <p>○また、地元住民のみならず市外の様々な人々による出店やボランティア参加（関係人口）によって支えられるスポーツツーリズムとして発展してきており、大会開催時以外の人の輪の拡大にもつながっている。</p>



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・新城市の豊かな自然環境を味わい、地域に暮らす人と触れあい、楽しく走ってみたい、という想いで開催されている「DA MONDE TRAIL」。今や奥三河を代表する人気のスポーツイベントに成長している。
- ・新城市に地域おこし協力隊としてUターンしてきた有城辰徳さんが平成 27 年より手掛けてきたこのスポーツイベントは、新城市にある愛知県民の森を舞台に一周 2.7 kmの特設コースを周回する耐久レースで、3 時間の間で何周走ることができるかを競うレースである。
- ・勾配のある険しい山道を走るトレイルランとは違って「DA MONDE TRAIL」は、ソロやチーム、ファミリーでも参加できる。経験者も初参加者も、ランナーもその仲間や家族も、会場にいる全員が楽しめるフェスのようなトレイルレースであるのが特徴。
- ・レース出場者以外にも楽しめるように、会場内には飲食や買い物、ワークショップなどが楽しめるブースが並び、軽快な音楽も流れ、さながら音楽フェスのような気軽で楽しい雰囲気がある。
- ・新城市では平成 22 年頃からスポーツツーリズムを通じた地域おこしを進めている。その一つにトレイルランの大会もあったが、上級者向けのスポーツであったことから、「裾野を広げるため、初心者でも楽しめる大会があってもよいのでは」という考えから「DA MONDE TRAIL」を立ち上げた。
- ・地域おこし協力隊としての任期を満了した平成 29 年には「一般社団法人 DA MONDE」を設立して起業。「DA MONDE TRAIL」に



加えて、サイクルスポーツやフォトロゲイニング（地図上に設定されたチェックポイントを制限時間内で巡り獲得した合計点を競うスポーツ）などを実施。奥三河に暮らす人々や新城市役所との協働はもとより、東三河地域内外の人たちを巻き込みながらスポーツツーリズムを展開している。

【活動概要】

- ・春と秋の年2回開催され、毎回500人もの方が集まる「DA MONDE TRAIL」を支えているのは、新城市内外に暮らすボランティアである。ランニング好きの人もいれば、運動とは無縁であるが大会を観覧することが好きな人、イベントの雰囲気好きな人など動機は様々。中にはスポーツ好きな市や県の職員ボランティアも大会の担い手になっている。また、他ジャンル（自転車関係、行政関係）からの支援を幅広く受けて大会を運営している。
- ・ボランティアは、一般ボランティア（受付・コース内選手誘導・チップ回収・駐車場等の一般業務）と救護ボランティア（本部テントにて救護業務を行う看護師・救急救命士等の資格をお持ちの方）に区分され、多い時には市内外から80人が集まる。



【特色・工夫】

- ・スポーツを「支える」という側から見る大会であることが「DA MONDE TRAIL」の最大の特徴である。多くの人々に支えられていることから、大会が終わった後も人と人の関係性が持続する。
- ・令和元年秋には、喫茶店を兼ねたスポーツツーリズム交流拠点「ヤングキャッスル」を開設した（次の活動に向けて令和4年11月に閉店。引き続きダモンドトレイルの事務所として活用）。日常的に「DA MONDE TRAIL」の雰囲気を感じながら人と人がつながれる場として機能している。
- ・スポーツツーリズムで地域を盛り上げるためには、多くの地元住民に認識してもらうことが必要である。より多くの市内外の人が競技に参加するだけでなく、イベントの企画・運営側に参加しながら楽しむことが大切であると考え、ボランティアや出店、観覧など多様な参加の機会を設けている。
- ・大会をあまり大きくせず適正規模にして、共感を生みやすくするよう工夫をしている。また、春と秋の年2回足を運んでもらい、奥三河のファンになってもらう工夫をし、観光交流人口、そして、関係人口を増やしている。

【成果・課題と今後の展望】

- ・地域ぐるみで、さらに関係人口も巻き込みながら開催してきた「DA MONDE TRAIL」は、奥三河を代表する人気のスポーツイベントとして定着化している。また、サイクルスポーツやフォトロゲイニングなどのトレイルラン以外のスポーツイベントも展開している。
- ・これまでの活動で見えてきたことや、出会えた方々との関係を活かしながら、環境整備や教育、一般観光振興など、新たな事業の展開を模索している。

問合せ・連絡先

一般社団法人 Damonde 代表：有城辰徳さん

■電話 090-1474-9355

■事務所 〒441-1384 愛知県新城市豊栄 932 番地

「気軽に働きたい個人と人手不足の農家をマッチング」

株式会社アグリトリオ（豊橋市／民間企業）

構 成 員	<p>【地元】社員 10 名、農家約 700 名</p> <p>【外部（関係人口）】働き手（クルー）の登録者数約 10,000 名（令和 5 年 2 月現在）</p>
マッチング PR 方法	<p>○農作業アルバイトマッチングサイト「農 How」</p> <p>○福祉施設と農家をつなぐ請負型農福連携サービス「農 Care」</p> <p>○行政との連携事業（農林水産省、愛知県、愛媛県、豊橋市など）</p>
取組のポイント	<p>○農業の人手不足という社会的課題の解決を目指し、人材不足で働き手が必要な「農家」と、農業に関心がある、気軽に働きたいといった人とをマッチングする新しいカタチのプラットフォーム。</p> <p>○機械部品の製造で培ったマニュアル化のノウハウを生かし、農作業のポイントを分かりやすく説明した動画・静止画マニュアルを製作。働き手に事前にマニュアルを確認してもらうことで、未経験者でも即戦力としてスムーズに農作業ができる仕組みを構築。</p> <p>○誰でもできる仕事として、空いた時間でお金を稼ぎたいという短時間利用の方から、農業を志す方まで多様な関わり方を可能にして間口を広げている。</p> <p>○農業の人手不足解消につながるビジネスモデルとして全国に拡大している。</p>



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・豊橋市やその周辺一帯の三遠地方は、全国的にみても有数の農業が盛んな地域。豊橋市の地元のものづくり企業である武蔵精密工業の若手社員が「この地域に対して会社として何か社会貢献ができないか」という想いからスタート。
- ・代表者をはじめメンバーは農業経験はなかったが、やり方によっては儲かる成長産業ではないかと感じ、社内の新規事業コンテストに応募。約 80 人の農業者の生の声を元に、農業の現場が抱えている人手不足を解消する仕組みとして「農 How（ノウハウ）」を新規事業として立ち上げた。
- ・製造業×農業の新しいコンセプトで、「地域に根差したワクワクする生活を提供する」をミッションとして掲げ活動している。株式会社サイエンス・クリエイトが運営する「Startup Garage」の支援も受け、令和 2 年 4 月には分社化。日本初のマッチングサービスとして特許出願済。

【事業概要】

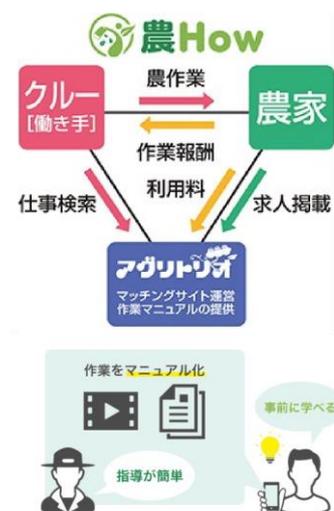
- ・スマホのマッチングアプリ「農 How」を通じて、“人手が欲しい農家”と“短時間・短期間で気軽に働きたい個人”の双方をつなぐデイワークマッチングサービス。主婦や会社員などが働き手として登録し、平日の空いた時間や休日に植え付け作業や収穫、梱包作業などを担っている。

- ・農家も働きたい人も無料で登録できる。マッチングが成立すると農家が1時間あたり300円のサービス利用料を支払う仕組み。令和元年8月に「農How」が正式にリリースされると、わずか1年間で働き手（クルー）は約900人、契約農家は約100名に達した。
- ・農業にはマニュアルが存在せず未経験の方には敷居が高いため、なかなか人手が集まらない。そこで、製造業で築き上げた生産作業のマニュアル化技術を活用し、農家が持つノウハウを未経験の方と共有できるように動画の作業マニュアルを作成している。
- ・30～50歳代の女性がボリュームゾーン。最近では、大学生やシニア、副業・兼業として働き盛りの男性がクルーとして働くケースも増えている。
- ・クルーからは、「希望時間で働けるから子育てと両立できそう」といった声が寄せられている。中には、「新規就農を考えているので、どんな作物が合っているか確かめたい」といった動機でクルーになる人もいる。



【特色・工夫】

- ・スマートフォンで作業内容を事前に確認できて、いつ、どこで、どのような農作業をやるのか、作業手順や方法を動画でわかりやすく説明している。
- ・最新技術を活用して農作業を見える化している点が競合サービスと大きく異なり、幅広い層の参加を実現している。
- ・野菜や果物などの栽培マニュアルが200以上作成されている。この作業マニュアルをみて、農家や作物の好みで仕事を選ぶことができる。
- ・働きたい人には、バイト代をもらいながら気軽に農作業にチャレンジできる機会や、プロの農家のもとで働いて色々な品目の農作業を学ぶ機会を得られる半農半Xの入り口としても活用されている。
- ・モバイルアプリの提供で、サービス利用地域を全国へ拡大。
- ・最近では、副業を認める企業も増えていること、また、コロナ禍で屋外の農作業の需要が増したことから、会社員などの登録者数も増えている。



【成果と課題、今後の展望】

- ・家族や親せき、知り合いでなんとか人手を賄っていたが、広く外部から募集する方法を構築することで、東三河の主要な産業である農業を持続可能なものになっている。
- ・さらに新たな事業として、福祉施設と農家をつなぐ新しいカタチの請負型農福連携サービス「農Care」を展開し、障害者雇用という社会的課題の解決にも取り組んでいる。
- ・地元東三河や農林水産省等のビジネスプランコンテストなどで受賞歴多数。
- ・全国での市場調査を実施し、令和2年10月からフランチャイズ方式で多地域展開を進め、中部圏をはじめ関東や九州などに拡大。「クルー」登録者数は10,000人を超え着実に実績をあげている。
- ・将来的には、農業への就職につなげる支援を考えている。

(参考・出典：「アグリトリオ 農How」、あいちdeニューノーマルの選択肢、半農半Xな暮らしガイド（愛知県）

問合せ・連絡先

株式会社アグリトリオ 代表者 石川浩之

■電話 0532-82-2862 ■<https://agritrio.co.jp/nouhow>

■所在地 愛知県豊橋市植田町字大膳 39-5

「豊川・豊川用水で生まれ、つながりを広げる流域農業」 ゆたかわファーム（田原市・東栄町／農業法人）

構成員	【地元】田原市、東栄町にある2箇所のゆたかわファームで営農 【外部（関係人口）】お米・野菜の定期宅配延べ約 250 件（うち約半数が東三河地域）、農業体験者 20 名程度/年間
マッチング PR 方法	○なりわい実践者事業（三河の山里サポートデスク）を契機に東栄町での営農開始 ○定期宅配や朝市への出店を通して、農業を通じた流域のつながりを創出
取組のポイント	<p>○東三河エリアを流れる豊川・豊川用水の流域を活動エリアとして捉え、流域内で生産と消費を行うことで、づくり手も食べる人も笑顔になり、自然環境が維持される新しい地域社会の仕組みを模索。</p> <p>○上流域の東栄町と下流域の田原市渥美地区のそれぞれの農場で採れたお米や野菜、加工品などを定期宅配で会員に提供。さらに、豊橋市や名古屋市の朝市出店を通して販売と人のネットワークを拡大。</p> <p>○また、山・川・海の自然に触れながら、田畑での収穫や、味噌や醤油の加工など、親子で楽しめる体験機会も提供。</p>



【地域の概況、背景・きっかけ】

- ・農業法人株式会社ゆたかわを創業した石川さんは、温暖な気候に恵まれて全国でも有数の農業生産地である田原市の農家で生まれ育った。大学卒業後、複数のNPO・NGOで子ども向けの体験プログラムの企画・運営などを経験し、大局的な理念と足元の生業の両立の大切さを実感していた。
- ・結婚を機に、実家と別に石川農園を立ち上げて有機栽培の米づくりに取り組み、10年近くで定期配送による販売を定着させた。その後、実家の農地を引き継ぎ、一年を通じた農産物の生産・販売・消費の循環を意識し始めた。
- ・さらに、環境問題、山間部の高齢化問題、子どもの未来などを考え、これまで通りの農業を続けるだけではなく、豊川・豊川用水によってもたらされる農業の恵みを上流域に還元したいという思いから、「ゆたかわ構想」を発想し流域農業に着手した。
- ・令和元年度、三河の山里サポートデスクが主催する「なりわい実践者」に応募し、東栄町で維持管理に困っていた農地を有効活用するかたちで、ゆたかわファーム東栄を開設。上下流域それぞれでの生産体制を構築した。田原市と東栄町の農園を併せて、法人化をして就農者の雇用環境を整え、現在では、各ファームで2名ずつ常勤従業員の雇用している。



【活動概要】

- ・豊川・豊川用水の流域の上流（東栄町）と下流（田原市）の各ファームで採れた旬の農産物やお米とともに、流域内の提携生産者の卵や野菜加工品を合わせて定期宅配することで、事業を通じた自然環境の保全、地域経済の活性化に努めている。
- ・定期宅配の利用状況は、お米コース、野菜コースで延べ約 250 件にのぼり、そのうち半数が東三河内の会員となっている（令和 5 年 1 月時点）。お米コースも野菜コースも、希望に合わせて宅配頻度を選択できるようにしている。
- ・ゆたかわの農産物は“なるべくオーガニック”での栽培を行っていることもあり、名古屋や関東、関西などの大都市圏からの需要が多い。一方で、豊橋市の有機農産物を扱う朝市に継続して出店するなど、東三河地域での消費拡大を大切にしている。
- ・また、NPO等での活動経験をいかして、づくり手と食べる人、自然と町を結ぶ取組として農業体験を提供している。具体的には、田植えや稲刈りをメインにしつつ、自然に触れ、親子で楽しめるプログラムを仕立てている。近年はコロナ禍の影響を受けながらも、令和 4 年度は 2 回開催し、それぞれ 5 家族程度が参加した。
- ・さらに、「ゆたかわ援農隊」として、繁忙期に農作業の手伝いをしてもらえるボランティアを募集している。現在は、農作業に興味や意欲を持つ会員に個別で声かけをする程度だが、少しずつ増えている。



【特色・工夫】

- ・石川さんは、経済の循環だけでなく顔の見える関係でつながることが重要であると考え、東三河の地域内でのネットワーク構築を重視している。
- ・このような取組を進めていく過程では、農業者、地域住民、消費者など、それぞれの生活様式、経験、考え方などの違いから様々なひずみが生じる。石川さんは、それらの問題から目を背けることなく、粘り強く解決につなげることにより、Win-Win の関係づくりに取り組んでいる。

【成果と課題、今後の展望】

- ・ゆたかわは事業を通じて、田原市とともに東栄町の農地を再生させ、流域農業・流域自給の考えに基づいた生産と消費のネットワークの形成という 2 つのつながりを東三河地域に生み出した。
- ・農家としての規模が大きくないため、現状、定期宅配の会員を増やすことは難しい。今後は、頑張つて農産物の生産量・供給量を増やし、「豊かな輪（ゆたかわ）」を広げていくことを目指している。
- ・令和 5 年には豊川市内に新たなファームの開設を予定しており、各ファームの農産物や会員の流通・交流の拠点として、消費者同士のつながりや小さなネットワークを生み出していきたいと考えている。

問合せ・連絡先

株式会社ゆたかわ 石川 卓哉さん

■電話 090-2922-1831 ■<https://www.yutakawa.com/>

■活動場所 ゆたかわファーム渥美、ゆたかわファーム東栄

「福祉体験のマッチングサイトで学生と福祉をむすぶ」

株式会社musbun (名古屋市/学生ベンチャー企業)

構 成 員	<p>【社員】15名 (学生メンバー)</p> <p>【外部 (関係人口)】福祉やまちづくりに関心のある大学生</p>
マッチング PR 方法	<p>○福祉体験の情報・マッチングサイト「musbun (ムスブン)」</p> <p>○福祉事業者や地域、企業との交流イベント</p> <p>○大学との連携事業 (至学館大学、豊橋創造大学など)</p> <p>○行政との連携事業 (愛知県大府市など)</p>
取 組 の ポ イ ン ト	<p>○学生と福祉に特化した情報サイト「musbun」を開発し、ボランティアやインターンシップなどを通して、幅広い分野の大学生と広域の福祉施設を結ぶ事業を展開。</p> <p>○「求人」ではなく「福祉体験」の機会を提供している。福祉施設でのレクリエーションのお手伝いや、オンラインを使った傾聴ボランティアなど、多様な募集を掲載することで、福祉を学んでいない学生でも福祉に関わりやすくなるように工夫している。</p> <p>○実際の福祉体験で福祉に興味を持つきっかけを提供し、多くのサポーター (関係人口) を創出している。</p>



【背景・きっかけ】

- ・少子・高齢社会の進展により、福祉サービスに対する需要の増大・多様化が見込まれる。一方で、介護保険制度や障害者自立支援法の施行により、利用者本位の質の高い福祉サービスの提供が求められるため、サービス提供の根幹である福祉人材の養成と確保が重点課題となっている。
- ・福祉・介護サービス分野においては、高い離職率と相まって人手不足になっている。人手不足解消への1つの対策として、就職期の若年層から「魅力ある仕事」として評価・選択される必要がある。
- ・代表の鈴木さんは、昔お世話になった高齢者に「恩返しできることはないのだろうか?」と考え、偶然目にした福祉施設でのボランティア募集のチラシからボランティア活動に参加した。そこで、福祉の魅力と福祉人材不足の深刻さを知り、この問題の解決に貢献したいと考え始めた。
- ・1回でも体験することで福祉のイメージが変わり、福祉の道に進んだり、ボランティアで福祉に関わる人が増えていくのではないかと考え、まず福祉に興味を持つきっかけを作るために、大学4年生の時に学生向けの福祉体験の情報サイト「musbun」を立ち上げた。

【事業概要】

- ・福祉のボランティア・インターンシップ・アルバイトなどの募集情報を提供し、学生と福祉事業者をむすぶサービス。学生と福祉施設が直接やり取りできるチャット機能や、スカウト機能を搭載。
- ・福祉体験を通して、福祉に興味を持つ学生を増やすため、「musbun」では求人ではなく「福祉体験」を提供している。福祉事業所は、介護にかかわる活動に限らず募集することができる。

- ・「利用者さんとゲームを通してお話しませんか？」など、まず楽しいところから入り、福祉体験に興味のある学生と、学生とつながりたい福祉事業者を結びつけるプラットフォームとなっている。
- ・豊川市の障害者支援施設では、学生との接点づくりに苦戦していたが、学生の目に留まりやすいアプリを使った情報発信「musbun」を活用することで、学生と直接的に接点が生み出されている。
- ・令和3年11月に、株式会社 musbun を設立し法人化。
令和4年1月、経済産業省が主催する「ジャパン・ヘルスケアビジネスコンテスト(JHeC)2022」で優秀賞を受賞。
- ・愛知県のスタートアップ支援拠点 PRE-STATION Ai に採択。



【特色・工夫】

- ・学生が福祉事業所を身近に感じ、活動してみたいという想いを抱きやすくなるように、事業所の雰囲気、スタッフの想い、どんな想いで立ち上げられたのかなどの情報を掲載している。
- ・餅つきのボランティア、クリスマス会のお手伝い、レシピ企画など、自分の得意なことを活かせる「社会貢献」や「まちづくり」と言えるような募集内容を数多く用意している。それにより参加のハードルを下げ、福祉を学んでいない人や、まだあまり福祉に興味がない学生にも参加しやすくしている。
- ・さらに、リモートでできる「デザイナー募集」などもあり、自分の得意なところから入り、福祉が身近であることを感じてもらえるように工夫している。
- ・学生の約40%がSNSで取組を知り参加しているため、SNSに力を入れている。一方で、事業所はメディア経由の問合せが多いため、メディア露出にも力を入れている。登録済の福祉事業者による口コミの影響も大きい。
- ・両者をバランスよく増やしていくために、認知度を上げていく必要がある。そのために、より多くの学生に musbun を知ってもらい、使ってもらうことで、登録した学生と事業所にしっかりとした価値を継続的に提供することに注力している。
- ・認知度アップのために産官学連携が必要と考え、すでに至学館大学や豊橋創造大学、大府市など大学や行政との連携を進めている。学校の授業に導入し、単位認定される取り組みも進めている。



【成果と課題、今後の展望】

- ・着実に事業所及び学生の登録数を伸ばしている。学生からは「福祉体験に踏み出すことができた」「福祉の魅力に気づけた」、福祉事業者からは「ボランティアを通して新卒採用に繋がった」「今まで出会えなかったような学生と接点が増えている」という声が数多く届いている。
- ・学生が気軽に福祉体験できるような環境を充実しつつ、今後は「福祉体験から就職」という大きな流れを作っていくことを目指している。将来的には、職業紹介や提案を行うことも検討している。
- ・福祉人材不足の課題解決は、musbun だけでは解決は困難であると考え、行政や大学、さらに求人サイトや企業等の多様なパートナーとの連携強化を進めている。

(参考・出典：「musbun links」HP、「創業手帳」HP、「KAIGO LEADERS」HP)

問合せ・連絡先

株式会社 musbun 代表取締役 鈴木萌芽

- メール musbun.moemi@gmail.com ■ <https://www.musbun.jp/>
- 所在地 愛知県名古屋市中村区平池町 4-60-12 グローバルゲート 11 階
- 電話 090-9339-5603